
居候 2

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候2

【Nコード】

N9799A

【作者名】

KMY

【あらすじ】

（この小説は<http://ncode.syosetu.com/n9526a/>へ移動しました）治は中学2年生になっていたある日、帰ってみると治の机の椅子に一人の少女が座っていた。その少女は、かつて治の家に居候したハルスであった。ハルスは本気で治のことを好きになっていたが、ハルスの記憶を取り戻した治は、そんなハルスを忌まわしく見る。濁点がめちやくちなことで大不評の「居候」の続編！

第13話 再会（前書き）

この小説は、本来「居候」の続編として、機械的には別の連載小説として、書くはずでしたが、統合したくなったので統合します。

つてわけでした、第1部と第2部が同じ連載小説としてまとまります。

なので、この連載小説ページは一応残しておきますが、お気に入りの中の「居候」小説は、

<http://ncode.syosetu.com/n9526a/>

へ変更してください。

こっちのn9799aの小説はもう更新しません。

続き（第23話以降）は、n9526aに投稿します。

なお、これにより、第1部、第2部・・・の概念はなくなったりしません。

今後も、居候をよろしく願います。

第13話 再会

一ノ谷中学校2年生、零時治。

2年1組の教室。そう、今日は1学期が始まったばかり、4月中旬。

放課後久しぶりに部活にありついた彼は、IQ部に所属している。IQ部とは、いろいろな知能的問題を考え出す部活であり、もしも作った問題が10人以上の人に分かったら、出題者は退部、という厳しい部活である。

なので、この部活に所属しているのは、IQ130の零時治と、IQ150の3年生の小山海、IQ320の1年生の北条真弓の3人のみであった。しかも、先輩はIQで決めるため、1年生が先輩である。

しかも、IQ部に入部するには、テストが必要である。一ノ谷中学校で入部試験の必要な部活は、IQ部だけである。

「では、この画用紙に問題を書いてください。」

北条真弓が言い、3枚の紙のうちの2枚を、治と海に配る。

「もうできたんですか、先輩。」

3年生が1年生に「先輩」と言うのはおかしいのだが、部活の規則である。

「ええ、あたしはもうとくにできているのよ。」

1年生が3年生に敬語を使わないのは、IQ部ではもうすでに日常茶飯事になっていた。

「見せてください。」

治が、真弓に言う。

「だめよ。類題は違反じゃないの。」

「……………」

二人は、黙って机に向かう。その机に向かっている治を見ると、

真弓はあることを思い出し、言った。

「零時。」

「は、はい？」

「噂じゃ、今年の2月に女の子と付き合っていたよね。」

「でも、顔すら思い出せないのです。」

「そう？名前は何で言うの？」

「みんなの話だと、ハルスって言うようです。」

「ハルス・・・？外国人の名前ね。」

「ええ、はい。」

「では、問題を書きなさい。」

「はい・・・。」

治は、そう言うと、黙って机に向かった。

今年の2月。ハルスがいなくなつて最初の学校。クラスメートに色々「ハルスはどうしたの」とか言われて、ついには先生にも追及されたが、知らないものは知らないのである。（忘却術をかけられたから。）しまいには、理科の関口先生にまで尋ねられた。関口先生に尋ねられる事自体大事件ではあるが、知らないものは知らないのである。ついにハルスとか言うやつは退学扱いになった。あいつは、曰く魔法使い。曰くかわいい。曰く、治のことが好き。曰く、黒いマントに白いカッターシャツ。曰く、ピンク色の髪。曰く、治の家に居候している。クラスメートにこう言われても、思い出せないものは思い出せないのである。

「零時！ぼんやりとしていないで書きなさい！小山はもう書きました！」

その真弓の言葉に、治は我に返る。

「は、はい・・・。」

治は、慌てて机に向かう。

「制限時間2分あけるわ。・・・1分30秒・・・。」

真弓が時計を見ながら30秒ごとに答える。と、ぱんとドアの開く音がする。そこには、徹底的几帳面の羽生がおるがいた。

「きつちり1秒ごとに数えなさい！」

「入部希望ですか？」

真弓は、平然と答える。

「あんたが1秒ごとに言わないんだったら、あたしが1秒ごとに数えてあげる。感謝しなさいよ！」

そう言うかおるは、陸上部。しかし、今日は悪天候であり、廊下で走っていた。

「1分6秒、1分5秒、1分4秒、1分3秒、1分2秒、1分1秒、1分、59秒、58秒、」

かおるが早口で言う。

「うるせえよ！」

治が、堪忍袋の緒を切らして、立ち上がってかおるに怒鳴る。それでも、かおるは続ける。

「46秒、45秒、44秒、43秒、42秒、41秒、」

「うるせえよ！」

治が、かおるの襟を掴む。しかし、かおるが口から出す言葉はただ一色、

「32秒、31秒、30秒、29秒、28秒、27秒、」

「だまれ！」

「17秒、16秒、15秒、14秒、13秒、12秒、」

「しつこい！」

「5秒、4秒、3秒、2秒、1秒、0秒、はい時間切れ。」

気が付いたら時間切れになっていた。

「はい、治、退部。」

真弓が平然と言った。

「羽生！てめえのせいだ！」

治がかおるの襟を前後に揺らす。しかし、もうすでに後の祭りであった。

「きちんと数えない北条真弓が悪いの！」

真弓は、いきなり自分の悪口を言われ、かおるの頭を後ろから蹴った。

「痛っ！」

「出ていって！二人とも！」

二人とも2年生なのに1年生にIQ部室を追い出される。しかも、治は退部とくる。

「いいかげんにしろよ！」

「あら？あたしは先輩よ！」

「1年生だろ！それに俺はもう退部したんだ！」

「それじゃ、入部試験を受ける？」

「受けるか！」

治は、かおるを引っ張って、部屋から出ていった。後ろからドアの閉まる音がすると、治は振り向いてドアに向かって怒鳴った。

「上等だ！こんな部活、誰が入るか！」

「本当にあれでいいのか？」

小池正志が、心配そうに治に尋ねる。

「いいんだよ！」

2年1組の教室では、運動部の男達が部活を終えて着替えている。

野球部の正志も、着替えの真っ最中であつた。

「上等だ！IQ！サッカー部に入って、いつかサッカーボールで部室の窓を割ってやる！」

「なにもそこまでしなくても・・・。」

正志が、治をなだめる。

「一緒に帰ろうか？」

正志がこう言うと、治は黙って机の中の教科書やノートを取り出してゆく。すでに雨はやみ、雲の合間から橙の色が覗かせていた。

「じゃ、ここでお別れだね。」

正志が、治に言う。治は、黙って手を振る。正志は、その手を見ると、「さよなら」と言つて、そのまま行つてしまった。治は、その後ろ姿を見送ると、自分も家への帰路を歩いていった。

「たたいま……」

治が、玄関で気弱そうに言う。

「あらあら、どうしたの。」

母が、居間のドアを開け、出迎える。

「いろいろあつてね……」

「そう。お疲れさま。じゃ、あたし晩御飯作るから、できたら呼ぶわね。」

「うん……」

治は、そう気弱そうに言うと、居間に入ってドアを閉める母を見てから、自分も靴を抜いて階段を上つていった。

治は、彼の部屋のドアノブを回す。ドアが開くと、治はその部屋を見回した。異変。自分の机の椅子に、誰かが座っている。ピンク色の髪の毛。黒いマント。クラスメートから聞いた”ハルス”の特徴であつた。

「誰だ！」

治は、こう怒鳴つた。

「俺の椅子に座るな！名乗れ！」

しかし、”ハルス”は、向こうを向いたままびくりともしない。机の前の窓の向こうの景色を眺めているらしかった。両手を机に腕組みをして乗せていた。腕が白っぽい。白いカッターシャツ？しかし、彼は、それを”ハルス”とも認びもせずに、つかつかとその椅子に近づく。ピンク色の頭を殴る。

「立て！」

しかし、この人は立たない。人形の如く、びくりともしない。治は、この人の座っている椅子を手前に押し倒そうとした。と、この人が脇から一本の棒を取り出し、後ろに向ける。

「クロス。」

女の子の声だった。少女は、窓を向いたまま、言った。治が後ろを向いてみると、ドアは閉まっていた。再び少女を振り向き、

「出て行け！」

と怒鳴った。しかし、少女は、棒を机の上に置いたままびくりともしない。しばらくの沈黙が流れた。やがて、少女が押し殺すような声で言った。

「なつかしいわ、治……。」

「なつかしいって何がだよ！」

治は、少女に向かってそう怒鳴る。少女は、ようやくその顔を治のいる方へ向けた。治は、その顔を見る。

かわいい。ピンク色の髪。黒いマント。白いカッターシャツ。茶色のスカートみたいなやつ。こいつは、ハルスなのか？

「ハルスなのか？」

「そう……。あたしの名前だけは忘れていなかったようね。」

「じゃなくで、みんなに教えてもらったんだよ！」

「そう。」

少女は、ぶつきらぼうに言うと、急に涙を流し、座ったまま治に抱きついた。

「治！」

第13話 再会（後書き）

「ラストが面白くない」との苦情を頂き、続編を書くことにしました。続編も12話で完結させる予定です。場合によっては、「居候3」を書くかもしれませんが、とりあえず、今回の小説は二人を中心にしていきたいです。

前作での「あいづら」の正体についても言及していく方針です。はい。

第14話 逆吊

「なんだよお前！」

治は、いきなり自分に抱きつく少女の頭を、ぼかりと殴ってあげた。

「なくらないてよ！」

少女は、大きな声で言う。

「・・・ああ、そっか、忘却術かけていたもんね。」

少女は、独り言のようにつぶやき、棒を治の顔に向けて、言った。

「リメンバー」

そう言われると、治は、目の前にある物体を認めた。はたして、それはかのハルスの顔であった。

「は、はるす？」

治は、その驚きを隠せない。しかし、はっと我に返る。まるで前世の出来事を引き出すかのように、尋ねた。

「あいつらって、誰だよ！」

「今は説明する時間じゃないわ。それに・・・」

「寄るな！嘘だろ！」

「嘘・・・。。。」

ハルスの顔が、赤くなる。

「確かに、いつかそう言った記憶はあるわ。でも、」

「しばらく学校を空けといて、しかも俺に忘却術までかけやがって、それはないだろ！」

「だってえ・・・。」

「好きでもない人に好きって言うよりも、友達のほうがなじみやすいんだろ！」

「ええ、でも・・・。」

ハルスの様子は、なんか落ち着かない。以前の時より様子が少し変である。

「負けたのか？それで、俺に、」

「ううん、勝ったわ。」

「で、あいつらって誰だ？」

「それは・・・、人間の悪を司とる組織。無差別に、普通の人々に魔法をかけて、操って悪い事をさせる。よく、こつちの世界でも、なんでやったのかわからないって、色々聞くでしょ。」

「たまに見るニュースで事件の報道の時、容疑者がこう言っていたのを何回も聞いた事がある。」

「無差別犯罪教唆組織？」

「ええ。」

「なんだよそれ。なんのためにあるんだよ。」

「その目的は、あたしにもわからない。組織のボスを問いたためでも、上の者に言われた、とかで・・・。」

「おいおい、また忘却術をかけるつもりか。」

「そこまですらないわ。こつちも一応全部終わって解散したの。」

「それで？」

「目的はどうであれ、なくなればそれでいいっていう結論。でも、あたしはそれを許さない。」

「ハルスの表情が、急に強ばる。」

「いきなり何だよ。つまり俺にも仲間に、」

「違う。」

「じゃ、どうするんだよ。」

「パパとママが何で死んだか、上の者とかを探して、正体を突き止める。」

「はあ？」

「つまり、こ、この世界の案内役をしてほしくて。」

「この展開は、『はい、上はこの世界にいらっしやいます』とかじゃないだろ？」

「当たり前。」

「おい！」

治は、呆れた顔でハルスに怒鳴る。

「とにかく、もう一回居候をさせて。」

「だめだ！」

治が、ハルスの申し出を断る。

「なんで？」

「とにかくだな、お前は、凶暴な輩なんだよ。そんなやつに座られても困る。」

「ねえ、」

「とにかくだめだ！出る！」

治は、ハルスの腕を引っ張る。そのまま、机の前の窓を開ける。2階。そんなものとうぜ魔法があれば何とかなるんだろ、と治はつぶやき、ハルスの体をそのまま窓の向こうへ押し出そうとする。

「とにかくだな、俺を、このしがない俺を、僕呼ばわりするなんて、無礼がありすぎる！いったいどういう教育をしているんだ！」

治が、怒鳴る。

「それに、何で俺なんだよ！もつと他の人を当たれ！他の人を！」

もうすでにハルスの体は逆さまになっていた。治は気付いていなかったのだが、杖は机の上に乗っているままである。ハルスは、慌てた。しかし、足を離してハルスの体を下に落とす権利は、治が持っていた。すなわち、治はハルスの足を、窓の中から掴んでいた。

「入れて！」

「いちいちうるせえな！」

「そ、それに、あたしのパンツ・・・」

「ん？」

スカートが逆さまになっているので、スカートも下めかけて向いてきたのである。

「嫌！」

「離すぞ！」

「離さないて！」

「じゃ、この家から出ていくと誓え！」

「嫌よ！治と一緒にいる！」

「だめだ！出ていけ！誓え！このパンツにかけて！」

とんでもない剣幕であった。その剣幕にハルスが巡り会うのは、初めてである。

「治君……。」

急に、声が柔らかくなった。

「なんだよ、いきなりおとなしくなりやかって！落とすぞ！」

「……あつ、あたし、空飛べない。だから落とさないで。」

「何でだよ！魔法使えるんだろ！」

「杖があればね。」

その言葉に、治は、自分の机の上にある杖に気付く。なんとなく悪い事をしたなと思った彼は、ハルスの足を引っ張って室内に下ろす。ハルスは、部屋に入るなり、机の上の杖を取り、治の股間を蹴り、倒れた治に杖を向けて言った。

「逆転。」

そう言うと、にんまりと笑った。

「今、相手を殺められるのはどっち？」

治は、冷や汗を流して、怯えた声で言った。

「は、ハルス様……。」

「違うわ！」

「ひっ！」

「ご主人様よ！あんた、僕でしょ！」

久々に僕扱いされた。

「僕のくせにご主人様に抱きつかない！ご主人様に抱きつかない僕は、いるはずがないわ！」

ハルスは、さりげない内容を、怒鳴った。

「は、はい……。」

治は、顔を真っ青にして、怯えた声で言う。

「分かったら抱きつきなさい！」

「は、はい……。」

治は、機械的にハルスの体に抱きつく。

「こら！もつと強く！」

「は、はい……。」

手が震えて、もつと弱くなる。ハルスは、そんな治の額をぶつ。治は、再度倒れる。

「とにかく、居候させてよね！」

「は、はひ……。」

治は、怯えた声で言う。

「これだから男は、といつもこいつも弱いんだから。」

その原因が自分であることに気付かないハルスは、つぶやく。

「それで。」

母が、言う。テーブルには晩御飯が並べられている。4つの椅子が左右2つに分かれており、片方に母、もう片方に治とハルスが隣り合って座っていた。

ぶるぶると箸を掴む治の肩を、ハルスは叩く。治は、びくっとして振り返る。そんな様子を、母はくすくすと見ている。母は、治に尋ねた。

「女？」

この一つの漢字に、ハルスの頬は赤くなった。しかし、治は、言い放った。

「違う！」

「僕！」

「ひ！」

「まあまあ、二人とも……。」

母が、二人をなだめる。そして、ハルスに向かって言った。

「久しぶりね。どこ行ってたの。」

「ええ、それが家の事情でして、」

「そうなの。まったく、学校があるのに迷惑ね。」

その言葉に、治はびくりとなった。

「学校？」

「え？」

ハルスが、その言動に気付く。

「そういえば、ハルス、長期欠席扱いになっていたんだっただ！」

朝。いつもの通学路なのに、何かが違う。

「なつかしいわね、学校」

ハルスが、両腕を伸ばして、歩きながら言う。両腕を下ろして、治に向かつて出した笑顔。治は、それも芝居の延長線なんだなと思い、反対のほうを向く。そこにあったものを見て、驚く。

「ひっ！」

「おはよう。」

「そうじゃなくて、何でお前がここにいるんだよ！」

そこにいた人物、それは、花尾武子であった。

ハルスがいなくなつて以来、治にしつこくつきまとうようになり、ストーリーのあだ名がついている。

「あら、久しぶりね。」

余裕の表情をハルスに向ける。ハルスは、憎たらしい顔になって、言う。

「久しぶりもなにも、あんたが勝手に言っているだけでしょ！」

「みんな、なつかしかっているわ。あなたのこと。きっと、学校では恋愛どころではなくなっているでしょうね。」

「くっ……。」

武子の予測は当たった。教室に入ると、生徒達が全員ハルスのもとに詰め寄った。

「どこ行っていたんだよ！」

「行くなら一言言えよ！」

その全ての言葉を、ハルスはつき飛ばす。そして、治の手を引っ張り、二人がかつて並んでいた机に向かう。

「あれ……？」

ハルスが座っていた机に、一人の少女が座っていて、向かい合ったハルスをじーっと見つめている。

第14話 逆吊（後書き）

エロシーンを書いてしまいました。

エロシーンを書くのは初めてですが、これでエロシーン？とか思うくらいしょぼいです。

とりあえず、これはあくまで脇役（？）ですので、本題に入ります。

この小説のジャンルなのですが、恋愛とSFとファンタジーのどちらにしようか迷ったのですが、小説家になろうには、複数のジャンルを選ぶ機能はありませんでした。なので、1つにしなきゃ・・・ファンタジーは1番目に除外しました。SFと恋愛とどっちにしようか迷いましたが、恋愛を中心とするのは第3部にしようか、と、とりあえず後回しにしまして、前作「居候」を受け継いで、とりあえずSFにしました。

第15話 水流

「誰。」

ハルスが、自分がかつて座っていた机に座っている少女に向かって、言う。しかし、少女は答えない。

「誰。」

ハルスは、もう一回問うた。しかし、少女は、口をむの字に結んでいる。

「誰。」

ハルスは、再三、いらいらした声で問うた。しかし、少女は、口の形を変えない。じーっとこちらを見つめている。

「誰。」

しかし、少女は、少しも動かない。銅像の如く、ハルスを見つめている。

「あーもー、しれったい!」

ハルスが、左脇に手を伸ばす。

「それはやめろよ!」

ハルスになだれ込もうとする友達を押しとめていた治が、ハルスが杖を抜こうとしているのを見て、飛びかかって制した。

「何するのよ!」

治は、倒れたハルスに馬乗りになっている。そのまま、こちらをじーっと見つめている少女に、言った。

「あ、五十嵐、久しぶりだな。」

五十嵐由美。それが、この無言の少女の名前であった。彼女は、生まれつき体が弱く、よく学校を休んでいた。そして、去年の5月頃から急に体の具合が悪化し、長期欠席になっていた。

「あつ、五十嵐!」

「大丈夫なの?」

他のクラスメート達も、ハルスのことを忘れ、由美の机のまわりに

たかった。

「なんなのよ、あいつ！あいつの名前もハルスなの！」
と、怒鳴るハルスの体を、治は廊下へ引っ張っていった。

廊下には誰もいない。

「おい！」

治が、ハルスに怒鳴る。

「お前なー、いらいらするから魔法なんで、高慢な人のやることだぞ！」

「……でも、こつちじゃ、魔力を基準に身分が、」

「言つとくけれど、こつちは封建社会じゃないんだ！誰でも自由に暮らせる社会に、高慢な人がやってきたら、みんな抗う！独裁者は、みんな死んでいるんだぞ！」

「あたしは、独裁者じゃない。」

「高慢だからだめだって言っているんだ！」

「だって、あいつ、何も言わなくせにかわいいんだもの！」

「あいつはあいつで、あいつの魅力があるんだよ！その魅力を強調するために性格があつたり！」

「それじゃ、あたしの性格はあたしの魅力を強調しているの？」

「高慢なところが、……うつ……。」

これ以上言ったら、ハルスが高慢であつてもいいよ、と言うことになつてしまう。治は、ごまかすかのように言った。

「とにかく、こつちの世界の用が済んだらとつと帰れ！お前のような人に、この社会は適合しない！」

「もつとはつきり言つて！」

「とにかくたなー、……。」

治が言葉を飛ばすと、ハルスは反射したように左脇から杖を取り出し、治に向ける。

「それ以上言うと？」

治は怯えた顔になる。追い詰められた顔、と言ったほうが正確だろ

うか。

「わ、わかっております、は、はいや、ぐ、ぐしゅじゅんさ、」

「何言ってるのよ！ハルスって呼びなさいよ！」

「は、あの、は、ハルス様・・・」

「様はいらない！」

「ハルス・・・き、昨日はご主人様と呼べって・・・」

「いいから、ハルスって呼びなさい！」

ハルスは、治に命令する。

「は、はい・・・」

「わかったら、もう一度言いなさい！」

「はい！」

「違う！」

「ハルス！」

しかし、その返事は呪文であつた。

「イクスプロージョン！」

爆発。治の顔のすぐ前が爆発し、治の顔は真っ黒になっていた。

「ストリーム」

この呪文を日本誤訳すれば、何が発生したのか分かるはずである。とりあえず、それくらい見苦しい結末なのである。「水流」。治の体は、水浸しになっていた。

「おい！こんな水びたびたの制服で授業に出られるか！」

「罰。」

ハルスは、短く答える。

「とにかく、かわかせ！」

「罰。」

ハルスは、杖を治の顔に向けたまま、ぎつとする。

「は、はい・・・」

治は、水浸しの姿で、着替えのある保健室に行こうとする。

「ちよつと、通った後はきちんと拭いてよね！」

治が通った後は、ぬれている。

「お前がぬらしたんだからお前が拭けよ！」

「罰。」

「いつもその言葉で終わろうとするな！」

「追加料金が必要なようね。」

「ひっ！」

「雑巾を取ってきなさい！」

ハルスがそう言うのと、治は慌てて教室の中に入った。

ぼたぼたぼたぼたぼた

ぼた。ぼた。ぼた。

「零時ハルス。久しぶりだな。」

少し表情を強ばらせて、2年生になって新しく担任となった葛飾先生が言った。葛飾先生は体育の先生で、ハルスが恐れている先生である。

「は、はい……。」

ハルスは、先ほど治がしたのと同じ怯え方をしていた。立っている。他の生徒達は座っている。治は体操服を着て座っている。

「とりあえず、私は、なぜ零時治が水浸しになったのか、理由は分かっている。今度何か変なことをやったら、杖は没収。」

「は、はい……。」

ハルスはうつむく。この言葉を聞いて、治は内心にやつとした。

そうだ。これを利用して、ハルスに”変な事”をやらせて葛飾先生にあの忌まわしき杖を没収してもらおう。そうすれば、お仕置きなんでないよな。ひひひひひひひひひひ……

ばかり。治の頭に、一つの強烈なこぶしが降りかかる。

「何ニヤニヤしてんのよ！」

「別にいいだろ！」

治は、我に返る。

五十嵐由美は、葛飾先生が「なんとなく」席を一番後ろに回し、

ハルスは再び治の隣に座ることになっていた。

3時間目の体育。初日に限ってあってはならないものはあるものであり、ハルスは少し怯えた表情をして、体操服をして教室を出た。もちろん、杖は教室の机の上に置いてある。

体育は、1組と2組の合同で、男は1組、女は2組の教室で着替える。ちなみに、二人は1組に在籍している。

教室に誰もいないのを確認して、掃除道具箱が開く。一つの影が、机を探す。お目当ての机はすぐに見つかった。お目当ては、この棒。この棒さえなければ、俺の計画はきっちり最後まで進行する。くくくく・・・影は、笑った。

「では、これより体育の勉強を始めます。」

葛飾先生が、生徒達全員を整列して座らせ、言う。生徒は、1組、2組、それぞれ30人くらいいて、合わせて約60人。こんなに多くの子供達をきちんと統括してのける葛飾先生は、元不良だったこともあり、その怖い顔でみんなをひびらせるのである。心理戦は、得意中の得意。その心理戦を前にして、ハルスの杖まで震えてしまった。なので、生徒達はみんなおしゃべりをしたりしない。みんな、まっすぐに先生の方を見ている。

「では、今日する事は、まず校庭を1000周。」

「えー!」「なんだよそれ!」「おおすぎ!」と、抗議の声が持ち上がる。しかし、葛飾先生はその迫力を以って制した。

「今日で全部終わらなければ次の体育に持ち込む。」

「ひ、ひい・・・」

生徒達は、渋々走り出した。

やっと100周を走れた頃、3時間目は終わった。

「何だそれは。あと9回もの貴重な体育の時間が、それにつぶれる計算になる。だらしない。」

生徒達は、へばってて抗議する元気もない。それを見て、葛飾先生は言った。

「あいさつはいい。解散。」

さすがに自分でも多すぎたかな、と少し思い直す葛飾先生は、まあそれでもいっかと思う。と、運動場に入っていくたちの悪そうな4人の男が見えた。全員、黒いサングラスをしている。

「誰だ！入学許可証は？」

しかし、次の瞬間、葛飾先生は、その4人の男の顔ぶれを見て、凍りついた。一番前にいた男が、言った。

「よう、久しぶりだな。」

それから、後ろの一人が一本の棒を一番前の男に渡すと、一番前の男は、その棒を葛飾先生に向ける。果たして、それはハルスの杖であつた。

「な、なんで、それを・・・」

ハルスは、びつくりした顔で立ち上がる。

「よう、かわいいな。」

一番前の男は、杖の先をハルスに向けて、勝ち誇った声で言う。

「魔法さえ使えなければ、こっちのもんさ。」

第15話 水流（後書き）

「中身は面白い」っていう意外な好評が来るようになりました。もっと面白くなるよう努めていきます！

・・・で、1つお願いがあるのですが、感想の範囲内が前作「居候」の中にある時は「居候」に、本作「居候2」の中にある時は「居候2」に、両方の中にある時は「居候2」若しくは最新のシリーズに、感想を入れてください。前作「居候」にばかり感想が入っていて、ちょっと困っています。まあ・・・すでに入れたのは入れなおさなくても結構ですが。

評価は、

作品評価：高いほう

文章評価：最悪

でした。濁点には自分でも注意しているつもりですが、知らないものは知らないんです。

校正する人を付けねば？という意見もありましたが、してもらえそうな人は身近にはいません。

まあ、完全無欠の小説はありませんので、神様がえてして僕にそうしたんだと思います。

（ちょっと作品評価を自画自賛的な・・・）

ちなみに、ハルスはどっかで聞いた様な気がします、なんとなく付けた名前です。

で、何だっけと思って調べて見たら、

・・・画家の名前でした。

こ、これ、偶然ですよね・・・あはは・・・ってわけでした、

ハルスの特技を「絵を描くこと」にせざるを得なくなつとります。
(笑)

第16話 不良

突然現れた4人の男にいきなり自分の杖を見せられ、
「返して！」

と言つても、体が前に進まない（零時）ハルス。

「魔法が使えなければ何も出来ないだろ。」

と、翻弄する4人の男。

「か、か、かえし、かえしてください・・・」

と、怯えた声で、真つ青な顔で、言う葛飾元不良先生。

一人の男が、手に持っていた小さなつぼを前に突き出した。

「これ以上お嬢さんが変なことをしたらこのつぼを開けまして？」

「そ、それだけは・・・。」

葛飾先生は、必死で応える。

「いいじゃないか、よう、相棒にそれはないだろ。」

この言葉に、生徒達はどよめく。

「ちよつと、先生、どういふことですか！」

羽生かおるが立ち上がる。他の子供達も、次々と立ち上がる。生徒達に背を向けたまま、葛飾先生は重い声で言った。

「座りなさい。」

しかし、多くの生徒達は座ろうとしない。座っている、若しくは座った生徒は十数人しかない。それを見て、不良たちはにやつとした。

「これから3数えるうちに全員座っていないと、このつぼのふたの行方は知れなくて？」

「ひ、ひい・・・」

葛飾先生は、怯えた声で、生徒達の方を向いた。

「3」

「座れ、座れ、座るんだ！」

「2」

「座れ！さもないと死ぬ！」

「1」

「座れ！座るんだ！後でどうなっても知らないぞ！」

葛飾先生は、その剣幕を以って生徒達全員を座らせようとするが、杖を盗られたハルスだけは座ろうとしない。

「座れ！」

「0」

この、ゼロの声が大きく響いた。

「ち、ちよっと、猶予をください……。」

葛飾先生が、真つ青な顔になって、不良たちの方に向かって言う。
しかし、不良たちは、

「約束を破った。その少女には厳しい罰を。」

「そ、そんな……。」

「見たところ、かわいいじゃないか。俺達のメイトにぴったりじゃないか。」

「そ、それだけは……。」

「だめだ。じゃ、ふたを開けてやる。」

「ひ、ひい……。」

葛飾先生は、両耳を塞いで、しゃがみこむ。教育者が子供達に見せるべきではない、哀れな怯え方であった。しかし、その理由は、生徒達にはすぐに理解できた。

前にいた不良がつぼを開けると、そのつぼから黒い何か（黒雲？）がざばーっと飛び出て、ハルスの体に巻きついてきた。

「何なのよ、これ！これじゃなくて、杖がほしいの！」

「その高慢さが命取りだぜ、お嬢さん？」

と、不良は指をちゅちゅちゅする。葛飾先生は、しゃがんだまま、後ろを全く見ていない。ハルスの体に巻きついた黒いものは、やがて少しずつ色が薄くなり、ハルスの中に溶け込んでいくのが分かった。
「ハルス！」

治が、立ち上がる。ハルスの、下を向いた顔を両手で持ちあげる。

そして、その目を見て驚いた。今までピンク色の髪の毛と共に彼女の象徴となっていた、ピンク色の目がどろんと黒みを帯びている。

「何か言え！」

「無駄だ。」

葛飾先生が、全てを知っているような、重い声で、しゃがんで後ろを見ないまま言った。

「じゃ、杖をあげる。来い。」

一番前にいた不良が、勝ち誇った声で言った。ハルスは、黙って治の手を振り払ってそちらの方に行った。

「ち、ちよつと、ハルス・・・！」

しかし、ハルスは振り返ろうともしない。一番前の不良が、黒いサングラスと短い茶色が混ざっているリーゼントの頭で、ハルスに杖を差し出した。ハルスがそれを受け取ると、不良は言った。

「その少年を殺せ。」

少年とは、言うまでもなく治のことであった。ハルスは、だまって治に杖を向けた。

「ち、ちよつとまつ、ハルス・・・？」

治が、慌てたように言った。しかし、ハルスは何も言わない。

「はっはっは、すぐさま殺せよ。」

そこまで言っつて、ハルスは、やっと口を開いた。治は、期待さえしたが、それは呪文であった。

「イクスプロージョン！」

いつもの小さな爆発は嘘かのように、大きな爆発があった。その爆煙が欠ける頃、中心地に一人の少年が倒れていた。体操服がひどく煤に汚れている。真っ黒と言うわけではないが、肌色の部分は見当たらなかった。

「それじゃ、来いよ。」

ハルスは、黙って不良のそれに従う。

「ち、ちよつと・・・」

かおるが立ち上がるうとするが、言う元気もない。

足音がなくなっってから、葛飾先生は、やっと立ちあがった。

「ち、ちよつと、生徒が連れ去られたんですよ！」

葛飾先生は、重い顔をしている。剣幕というわけではなく、強く反省している顔をしていた。

「なかつたことにしなさい。校長先生の反応を見る。」

「は、はい……。」

かおるは、そう言った。そして、続ける。

「さっきの黒いものはなんですか？」

「……それには、まず私の過去を話さなければいけないな……。」

葛飾先生は、いつもの葛飾先生ではなかった。

「こつちだよ。」

「待てよ！」

二人の高校生が、おいかけっこをしているかのように走っている。前を走っているのは、さっきの不良集団で一番前にいた男。後ろを走っているのは、今の葛飾先生。二人は、高校生の制服をしていて、人通りの多い夜の街の中を走っていた。やがて、人は少しずつ減っていく。気が付いたら、裏道にいた。ここは、袋小路の裏道の奥らしい。そして、壁にもたれて、10人くらいの高校生がいる。リーゼントをしている人がいれば、たばこをすっている人もいる。座っている人もいる。

「あ、はい。」

と、今の葛飾先生は言う。

「お前か。新入りの申し込みは。」

「はい。」

「強く！」

「はい！」

「そうか。もうすでに会議は済んでいる。合格だ。」

「ありがとうございます！」

「お前は、今から我らが『あさきゆめみしグループ』の一員だ。」
「はい！」

「それでは、これから、このグループに所属している人たちの機密を教える。知らない人はいないと言う位大切な機密ではあるが、外に漏れては大変だ。忠誠を払って、聞いてくれるな？」

「はい！」

「それでは、・・・その人、壺！」

一番奥の真ん中にいたボスらしい人が、近くの人から壺を受け取る
と、言った。

「この壺の中にはな、何が入っていると思うか？」

「お金ですね。」

「ばかもん！おはいらん！金と言え！それに、違う。」

「それでは、何でしょうか。」

「この中にはな、人を操る生命体が入っている。」

「そ、それは・・・」

「人にとり憑いたら最後、何でも俺の言いなりになってもらえる。
死ねと言えば死んでもらえる。今まで逆らった人は誰一人いない。

この壺を見せられたからには、お前にも忠誠を尽くしてほしいんだ
かね。」

「は、はい！」

昔の葛飾先生は、少し怯えきわまった声で言った。

「いいか、これは使い捨てではなく、何度でも使える。出して、入
れて、出して、入れて、の繰り返しだ。」

「はい！」

その壺を見せられた日から、葛飾先生はグループを脱退した。そ
して、あのような嘘をついてまで自分に従わすような人を作らない
ため、自分がそういった子供を作つてやると誓った。

しかし、不良グループに入る前に発揮していた独特の剣幕などは、
名残として教師になってからも残った。

「ちょっと！もともと先生が悪いでしょう！責任を取ってください！」

「たった一日の入部だけでそこまで言わなくてもいいだろ！」

治が、立ち上がって言う。

「治君、死んだはずじゃ？」

目の前で見た光景と反射した治を見て、かおるは言った。

「死んだふり。あの爆発、いつもよりすこしやわらかかった・・・。」

「

「えっ！？いつもより大きいのに！」

「きつと、魔法のかける位置を間違って上にそびれたんだと思う。」

治は、そう解釈する。かおるも、そりゃそうよね、と納得する。そして、先生の方を向いて、言った。

「校長先生にも、それ、話してください。」

第16話 不良（後書き）

「濁点を気にしないで読んだら結構面白かった」という意見を頂き、
すごく元気がつきました。

というわけで、これからもよろしくお願いします。

第17話 王族

「そうか。」

校長室で、黒いソファーに座って向かい合っている、葛飾先生と校長先生は話している。

「あさきゆめみしグループは、私もよく知っている。」

校長先生が、口を開いた。

「なぜなら、私もかつて入っていたからな。」

「ええっ！？それ、本当ですか！？」

葛飾先生は、思わず身を乗り出す。

「確かに、あのつばについては不確かなところもあるが、その効果ははっきり立証できた。しかも、操られているのはうちの生徒だ。これは、警察に通報しなければいけない。」

「しかし・・・。」

「説明会も開く。」

「しかし・・・。」

「どうしたね。」

「そんなことを言っても、みんな信じてくれそうですしょうか？」

「信じてくれるだろう。警察の中にもあさきゆめみし対策本部が置かれているそうだし。」

「で、でも・・・。」

「信じてくれる。」

校長先生が明言すると、葛飾先生は黙ってしまった。

「失礼します。」

と、葛飾先生は、席を立って校長室を出て行った。

校長室の前では、数人の生徒が制服に着替えて待っていた。ドアを開けた葛飾先生は、彼らの姿を見るなり、言った。
「授業。」

操られて不良グループ「あさきゆめみし」の本部に連れて行かれたハルス。

「やあ、可愛いこじゃねえか。」

細い裏道、袋小路の端っこに隠れるように集まっていた不良グループは、揃いも揃ってハルスを歓迎した。

「名前は何だ？」

一人の不良が、尋ねる。

「気を付けろよ。こいつ、魔法使いだからな。」

連れてきた4人のうちの一人が言った。

「それ、マジ？」

ボスらしき真ん中に座っていた人が言った。

「本当であります。」

「そうか。それにしてもかわいいなあ。こっちにきなさい。」

あぐらをかいているボスに対し、ハルスは黙って近づいた。

「座りなさい。」

ハルスは、座る。

「肩に抱きつけ。」

ハルスは、ボスの左肩に抱きついた。

「好きと言え。」

「好き。」

「はっはっは・・・俺も美女とは無縁だと思っていたが、こうやすやすと手に入るとはな・・・。お手柄だ。褒美は、後で会議する。」

4人組の中の一人が言う。

「あの・・・、その目的で連れてきたわけではありません。」

「お？」

「人質です。」

「うん？」

「あの・・・昨夜、決定したのではありませんか。あの目的のためだけに、一ノ谷中学校から人質を一人、拝借してきました。」

「そうか、あの決議か……。かわいいから永遠にそばに置きたいもんなあ……。」

その言葉を聞き、ボスと話していた不良は、しばらく考えてから言った。

「俺に考えがあります。」

そして、彼は、その考えをボスにささやいた。ボスは、にやつとした顔で、ささやいた部下の両肩を両手でふさぎ、

「それは妙案だ！」

と、言った。

「とりあえず、一斉下校することになった。」

葛飾先生が、教室にクラスの生徒達を集め、臨時HRで言った。

「必ず一人で帰るな。できるだけ3人以上のグループで帰る事。以上。では、帰る準備をしなさい。」

クラスメート達が帰る準備をしていて、教室が雑然となつている中、治は不安そうな顔をしていた。

ハルス。大丈夫か。俺の事僕僕ばかり言いやがって、自分の事は保障してない。しかも、その拳句ハルスと呼べとか言つて。訳分かんない。

「ちよつと、聞こえてるわよ。」

隣にいた、花尾武子が言った。

「ち、ちよつと、何でもないよ。」

「わかつた、治君ってハルスのことが、」

「違う！」

「準備！」

いつのまにか、治の前に葛飾先生が立っていた。

「準備しなさい。」

「は、はい……。」

「ちよつと、ハルスは？」

母が、心配そうな顔をして、一人で帰って来た治に聞く。

「さらわれた。」

治は、それだけ言うと、2階に駆け込んで行った。

からっぽの自分の部屋。この部屋は俺の部屋。でも、なにかが足りない。ハルス・・・？いや、あんな生意気なやつは、・・・・・・・・・・。

治は、ドアをぱたんと閉めた。そして、後ろに背負っているかばんを下ろさんと、机の前に向かう。そして、机の上に一枚の白い紙を見つけた。治は、その紙を手にとって、眺めた。

「お前の大切な人 頂戴する。 悔しければ この紙を逆さまに見よ あさきゆめみし」

悔しいか・・・？治は、自分にそう問いかけた。思えば、あいつはかわいいくせに俺のことを軽蔑する。好きといいながら嘘だった、それでいてもっと付き添われるのは嫌だ。なのにもういつか会ってからいきなり俺に抱きついて、あいつ・・・。

「悔しくない！」

治は、叫んだ。その声は、部屋中に響き渡った。

「とうだ、応答はないか。」

ここは、いつかの闇。たくさんモニター画面が積み重ねられており、複数の人が椅子に座って、たくさんモニター画面の1つでもいいから表示されないか、と灰色の画面を見回っていた。

結局、数ヶ月前に墓場にいるハルスを発見したのたか、なぜかあの後すぐにまた画面が消えて、それっきり。

「とにかく、あっちの世界にいるのは確かだな。」

「はい、そのことを前提で設定しているのですか・・・。」

二人の男が、話している。

「でも、数年もハルス様のことをお探しになる、あなたはどんな目的を以ってお探しになるのですか？」

「・・・・・・この事は、誰にも言ってはいけない。」

「はい？」

「実は、ハルスは我がハーラ国の王族の唯一の直接の血縁者であることが判明した。ちょうど今のハーラ国を治めている王様も病弱でな。後継者争いが起きぬ間に呼び戻しておきたいのだ。」

「はあ・・・」

「誰にも言つてはいけない。」

「そうですね、それでたくさんのお金をご提示いただいたのですね。」

「追加料金はいるか。」

「いりません。我らがハーラ国の平和に貢献すると思えば、あのお金でも高すぎるくらいであります。」

「そうか。」

男は、黙って、灰色のモニター画面を眺める。もう一人の男は、商売スマイルとしての笑顔を絶やさない。

「訃報です！」

突如、後ろの茶色のドアが開き、ドアを開けた男が言った。

「何だ？ドアを閉める。」

「は、はい・・・。」

ドアが閉まる。

「で？」

「はい、我らがハーラ国の王様がご逝去なされました。」

「何！」

「すぐさま、事を急がねばなりません。」

「遺書は？」

「今のところ発見されておりません。」

「そうか・・・。」

訃報を伝えた男は、それだけ言つとその部屋から出ていった。ドアの閉まる音。男が、尋ねた。

「いかかいたしますか。」

「今後の対応は、お前も分かっている通り、より早期の発見だ。」

「はい、こちらら商売者として徹底的な対応を致します。」

「できるだけ早くな。」

「はい。」

一方、こちらはあさきゆめみしの本部。

「キスしろ。」

ボスが言うと、ハルスは黙ってボスの唇に自分の唇を押した。2つの唇が、合う。

「うっ……。」

ハルスの声帯から、うめき声が漏れる。しかし、その音は小さいが故に、誰も気が付かなかった。

ハルスの目から、微量の涙が漏れる。しかし、目が光った程度であるが故に、誰も気が付かなかった。

「これからお前は俺のものだ。」

ボスが、複数の不良を前に、横の女に対して勝ち誇った声で言う。

「名前は？言え。」

ボスがそう言うと、少女は、ゆっくりと口を開いて、言った。

「おさむ……。」

「おさむう？女のくせに男の名前なんだな。まあ、奇病者が名づけたんだろ。いいか、今から俺がお前の名前を決めてやるよ。聡子。どうだ、いい名前だろ。」

ハルスは、黒く濁った目を以って、口を以って、言った。

「お……さむ……。」

びりびりびりびり。

紙が破れる。

治の机の上の、あさきゆめみしの署名のある手紙は、治の手により、数十の破片と化した。

治は、その数十の破片を、一斉に机の前の窓を開けて投げ捨てた。「ハルスの顔は、二度と見ない。」

第17話 王族（後書き）

この「居候」シリーズと、漫画「さよなら絶望先生」（講談社）には、ある共通点があります。

なんと、タイトルをテーマにして話が進んでいるんです。

居候第1部は、さよなら絶望先生第1話「さよなら絶望先生」を、居候第2部は、さよなら絶望先生第2話「帰ってきた絶望先生」を、それぞれテーマにして書いています。

また、さよなら絶望先生には、タイトルと内容がそくわない場合が多く、

また参考になっているのは空くまでタイトルのみであって、内容は絶対参考にしていないので、

・・・でも、こういったタイトルのみを参考にしても、ファンフィクジョンに当たるのでしょうか？

タイトルと内容がそくわなくても、ファンフィクジョンに当たるのでしょうか？

よければ意見をください。

ちなみに、さよなら絶望先生第3話は「トンネルを抜けると白かった」です。

ひきこもりの話です。

とてもひきこもりとは思えないタイトルですし、

第3部も、この「トンネルを抜けると白かった」を参考にして書いて行きます。

ひきこもりなど、一切出しません。当たり前です。

第18話 偽死

「ここか、例の墓地は。」

二人の男が、白昼の墓地の中を歩いている。周りには、大きい墓、小さい墓、様々であり、端が見えないほどの広い墓地の真ん中であつた。狭い通路のうちの一つを歩いている二人の男。

「はい、そうでございます。」

二人は、一箇所で立ち止まる。

「ここが、最後の消息か。」

「はい、画面と見比べてみしても、間違いございません。」

「そうか。・・・ハルス、絶対に連れ戻してみせる。」

男がそう言い終わった刹那、突然二人の男の前に一人の少女が姿を表した。その少女の後ろには、黒い服に黒いサングラスをした二人の男が立っている。

「何をお探しで？」

少女は、言った。男は、直ちに言う。

「い、いや、こつちの話で。」

「こつちの話？」

「だから、君には関係ない事。」

「あるわ。ここは、あたしが作つた土地だもの。」

「ま、まさか・・・。」

怯えた声だつた。男は、冷や汗をながしている。

「そう、そのまさかよ。」

と、少女は、右手に持っていた杖を男に向ける。

「あたしは檸檬。岡田檸檬。」

少女は、勝ち誇つた声で言う。

「下下の人に襲いかかる魔法使いを追い求めたのが運の尽きね。あなたこそが、あたしたちが数週間前までに戦つたあの組織を作れと命令した、『上』の人ね。」

「・・・・・・・・。」

男は、黙った。普通に立っている。平然を装った、尋常な立ち姿。

「さあ、真実を吐露してくれないかしら。」

「・・・・・・・・あいにく、それを言わないのが悪者の誇りなんでね。」

紙の塵は、治の部屋の窓から散ってゆき、ふわりと風に運ばれていった。

「さよなら。」

治は、そうつぶやいた。

「またハルスちゃんいなくなったわね。」

次の日の朝。母が、玄関で靴を履いている治の後ろで、ぶつきらぼうに治にそう言った。

「まあね。」

治も、ぶつきらぼうに答える。

「さあ、いつてらっしゃい。」

「おはよう!」

治が、元気のこもった声で教室のドアをぱんと開け、教室の入り口で思わず嬉しくでみんなの前で言った。

「おはよう。」

「おはよう。」

次々と、生徒達が声をかけてくる。

「こうやって挨拶するの珍しいわねえ。あたしに未練でもあるんじゃないの?」

と、いつのまにか後ろに花尾武子がいる。

「なんだよ、ストーカー! いつのまにそこに・・・・。」

「さつきからいたの。」

このやり取りが終わるか終わらないうちに、二人の後ろには葛飾先

生が立っていた。

「おはよう。」

後ろから厳肅のこもった声をかけられて、二人は初めて葛飾先生の存在に気付いた。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

二人は、そう言うのと、席に戻って座る。治の隣の机は、空席。かばんを机の横にかけた治は、その空っぱの椅子を眺める。

「零時！」

葛飾先生のこだまが響く。

「今日は転校生の紹介だ！さあ、入りなさい。」

葛飾先生がそう言うのと、教室のドアが開き、一人の少女が入ってくる。

「えっ！？」

「おい！！」

生徒達の中から動揺が上がる。理由。その転校生の少女は、岡田檸檬……

「岡田檸檬だ。」

葛飾先生が平然と言う。そう、死んだはずの岡田檸檬本人である。

「ち、ちよつと、檸檬ちゃんは死んだはずじゃ……？」

治が立ち上がって、黒板の前に立っている檸檬に対して言った。しかし、葛飾先生は、首を横に振る。

「生き返ったのだろう。」

「そんなことないです！」

治は、否定する。

「そうです！きつちり葬式も済ませたはずですよ！」
かおるも立ち上がる。

「よろしく願います。」

檸檬が平然と、頭を下げる。

「そんな事言うんじゃないよ！」

怒りっぽい正志が、席を立ち、つかつかと檸檬に近づき、その頭をこぶしでぶん殴ろうとする。檸檬が目をつぶった刹那。

「やめろ！」

治が、正志の両手脇を後ろから組んでいた。

「離せ！」

「やめて！二人とも！」

檸檬が、挟む。

「なんだよ！お前が原因だつてのに！」

正志が言うつと、檸檬は、下をうつむいて言った。

「死んだことにしないと、かおるちゃんが治君にあたしの事言わないと思つて……。」

「えっ！？」

治が返す。檸檬は、黙って首を上げる。

「何を？」

治が尋ねる。しかし、檸檬は、黙ったまま治の顔に自分の顔を近づける。

「だ、だ、だから、」

檸檬は、黙っている。そのまま、ひたすらに治の唇に自らのそれを押し付ける。

「ん……。。」

かわいらしい声が、檸檬の声帯から漏れる。

「転校早々キスシーンとは、大物になるな。」

葛飾先生が、珍しくかつははと笑う。しかし、すぐに険しい顔になる。

「しかし、授業中にキスするとはけしからん。二人とも廊下に立て！」

「あの、先生、質問です。」

檸檬のあつたかい唇を押しつけた治が、先生に聞く。

「俺もですか？」

「当たり前だ。」

「そんな、俺は無理やり……。」

「つべこべ言うな！立て！」

「なんでキスなんですかよ！」

廊下で、治は檸檬に尋問する。

「だってえ……。」

檸檬は、顔を赤らめる。

「お、おい……。」

「あたし、かわいくない？」

そう言われてみると、檸檬は、かわいい。ハルスと並べてみても比べようのないような、日本人としてあるまじきかわいらしい顔。だから、俺、結婚したかったんだ……。

「とにかく！」

「はい？」

「お、お、俺は、ま、ま、また……あっ！」

無理やり話題を見つけた治が、言う。

「お前、本当に魔法使いか？」

檸檬は、黙ったまま首を縦に振る。頬は、赤いままだ。

「なんで直接言わないんだよ。ばか。」

「だって、そんな事を知られたら嫌われると思って、様子を見ていたの。」

「そっか……。いや、で、でもさ、こ、婚約者だから、」

「だから、」

「……。今でも好き。」

「本当？ハルスちゃんとどっちが？」

「檸檬。君だ。」

檸檬は、ほっとしたかのように真っ赤になってうつむく。そして、言った。

「あの、あたし……。ハルスが……。」

憎い少女の名前を並べられ、治はビクツとなった。

「転校の目的は、それが全てじゃないけれど、一緒にハルスを助けてほしいの。」

それを聞き、治は怪訝な顔になった。

「あいつはお断りだね!」

「そんな事言わないで!」

「いいや!あいつの暴政ぶりといったら!」

「ハルスちゃん、大金持ちで、」

檸檬が、ついに吐き出すように言う。

「執事の扱いに慣れているの。」

「だからって俺を僕扱いすることないだろ!」

「……あの人、もう分かっているみたいだから、大丈夫だと思う。とにかく、一緒に、」

「拒否。」

即答であつた。

「ねえ、」

檸檬が、治の左肩を両手で包み、救いを求める顔で治の顔を上に見る。

「だ、だめ……。」

治が、顔を赤らめて言う。

「と、とにかく、そんなかわいすぎる仕草なんですよ!」

「うっん、するわ!」

「……。」

治は、黙ってしまった。

「マイナスをプラスに変えるとはな。」

と、声がして、二人ははっと前を向いた。いつのまにか、葛飾先生が立っている。

「マスク!今すぐ!」

険しい声で怒鳴る。そして、二人にマスクを差し出す。二人は、黙ってマスクをする。

「うう……。」

人知れずの目立たない場所で、ハルスは、うめき声を上げる。誰にも命令されていないのに、そのどろんとした黒い目は何かを訴えるかのように、少し赤みを帯びている。

「お……さむ……。」

「なんだ、こんなところにいたのか。」

後ろからボスの声がする。ハルスは、黙って振り向く。

「さあ、今日は初めてのデートだよ。」

平日白昼堂々のデート。しかも、嫌いな人と。

しかし、操られている彼女は、その黒き心を以って、従順に従うのみであった。

第18話 偽死（後書き）

なんか自分でもはらはらしてきます。

自分の書く小説って、自分も考えていないほうに話が進みます。
なので、当初考えていた、すごく感動的なエピソードも、
なしになるかもしれませんw

とりあえず、第19話から、戦いが始まります！多分・・・。

第19話 回復

マスクをして廊下に立っている檸檬と治。葛飾先生が教室に戻るのを確認すると、檸檬は、マスクを外して治の耳にそつとささやく。
「行こう。」

「え？」

治は、マスクを外さないまま、生返事した。

「ハルスを助けに。」

「でも、」

「行くわよ。」

檸檬は、強制に治の腕を引っ張り、そして、治のマスクを引っつかんで放り投げ、自分のマスクも下に落とすと、脇から杖を取り出す。
「ワープ」

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり

娑羅双樹の花の色 盛者必衰の理を表す

驕れる人も久しからず ただ春の夜の夢の如し

たけき者もついには滅びぬ 一重に風の前の塵に同じ

「うるせえな！」

一人の、ピンク色の頭をしてその顔と割に合わない体操服を着ている少女を引っ張り、一人の、大きな大人が、道路わきでわらをして座ってギターを引いている頭も服もぼろぼろの人に言った。この人は、わらの前の方にいくつかの小銭の入った一つの皿を置いている。乞食。

「ぎおん・・・」

乞食は、先ほどの歌詞を繰り返そうとする。ボスは、乞食を蹴飛ばす。周りを歩いている人たちは、そのことを気に止めない。もともと迷惑であつたからである。

「しょうじゃ・・・」

粘り強く繰り返す。それに対し、ボスはもう一度蹴飛ばす。

「のかね・・・」

再三蹴飛ばす。

「のおと、」

ボスは、ハルスに言った。

「やれ。」

「はい。」

ハルスは、機械的な返事を返すと、杖を乞食に向ける。

「イクスプロージョン」

乞食のひいていたギターが爆発し、乞食はついに「あわわわ・・・」と、おしげつく。その恐れ顔を見て、ボスは言った。

「うるせえ。静かにやれ。」

「い、いまのは・・・???」

乞食が、怯えた声で言う。

「ばーか、魔法に決まってるじゃねえかよ。」

ボスは、平然と返す。それに対し、乞食は黙って、怯えた顔で、敷いていたわらを片付け、小銭の入った皿に手を伸ばそうとする。その手を、ボスは払いのける。

「いいか、これは罰金だ。」

ボスは、その皿を取り上げ、手を伸ばそうとする乞食の手を強く掴んだ。ボキボキ・・・骨の折れるみたいな音がする。

「行くぞ。」

ボスがこう言って歩き出すと、ハルスは黙ってボスの後ろについていった。そこには、丸めたわらを持った乞食がいるのみであった。

「おい、学校を抜け出すなんて校則違反だぞ！」

「あんたの校則違反と友達の命と、どっちが大事なの？」

「友達じゃねえ！」

檸檬に腕を引っ張られている治は、街中で抗議する。

「だまってついてこればいいの。」

「じゃ、場所は分かってんだろっな！」

「分からない。ただ、なんとなくこっちのような気がして。」

「まぐれかい！」

そう言つて、治は、後ろから懐かしいにおいのするのを覚える。こつそり振り向くと、そこにはハルスとボスが、手をつないで歩いている。広いような狭いような歩道で、多くの人通りの中で、手をつないでいる。しかし、治にはもともとそんな意図はなかったのだ。だまって檸檬の方を振り向く。と、同時に二人の足が止まった。檸檬は、脇から杖を取り出し、ボスに向ける。

「誰。」

檸檬が言つと、ボスは言つた。

「お前こそ誰だ。」

「その女の子は、私の友達。」

「今は俺の婚約者だ。」

その「婚約者」の言葉を聞き、治は、心の隅っこに引っかかりを感じる。しかし、状況にはさほど影響しない。

「証拠は？」

「やれ。」

ボスがこう命令すると、ハルスは黙って檸檬に杖を向ける。どろっとした黒い瞳が、輝く。

「ち、ちよつと、ハルス・・・？」

黒いつぼの存在を知らない檸檬は、ハルスの目の色の変化にも気付かず、顔が次第に青ざめていく。

「ち、ちよつと、や、や、やめてよ、じ、冗談は・・・」

檸檬が、おそろおそろ杖の方角をハルスに変えながら言つた。しかし、その返事は魔法であつた。

「イクスプロージョン」

爆発がし、檸檬は一時は倒れかけるが、体勢を取り直す。

「ち、ちよつと、どうなつてるの？」

しかし、ハルスは答えない。

「廻りに人がいるのはめんどうだなあ。袋小路の端っこで続きをするか。」

ボスが言う。

「臨むところ・・・」

檸檬が、かすれた声で、言う。

場所はとある深めの袋小路の一番奥に移り変わって・・・

その袋小路の奥は、幅が80センチメートルくらいの、広いか狭いか微妙な幅であった。袋小路の端っこに行くまではたくさん、10くらいもの曲がり角を経ているので、後ろを向いても外は見えない。壁。袋小路の端っこの壁を背に、ボスとハルスがいる。ハルスは、ボスの肩に寄り添って、檸檬に杖を向けている。一方の檸檬と治は、手をつないでいる。檸檬は、杖をボスに向けている。

「あたしは檸檬。ハルスの友達。さあ、あんたも名乗りなさいよ。」

檸檬が言うと、ボスは口を開く。

「俺は、あさきゆめみしグループのボスだ。」

「あさきゆめみし？」

檸檬が疑問文を言うと、治が言った。

「あさきゆめみし・・・、昨日俺に手紙を送って、」

「そうだ。それだ。」

ボスは、にやりと笑う。

「どういっつもりなのよ！」

檸檬が、言う。

「戻ろう。」

治が、その檸檬の腕を引っ張るも、檸檬は動かない。

「あさきゆめみしって何なのよ！」

檸檬のその問いに、ボスは言った。

「多くの人は、一ノ谷市最大の不良グループと定義している。」

「不良・・・」

「それがどうした？」

「不良は、あたしがこの杖で成敗する！」

「しかし、そういうわけにもいかないのよね。」

ボスが勝ち誇った声でこう言つと、ハルスに「やれ」と言う。ハルスは、黙つて爆発の魔法を檸檬にはなつた。大きな爆発。誰もいないので、加減していない大きな爆発。たちまち檸檬と治の体は、後ろの壁にぶつかる。

「やれ。」

ボスのこの声が、何回も繰り返し響かれる。それに対応して、爆発が起こる。

檸檬と治は、ついに地面にぱつたりと倒れる。患者は、笑つて言つた。

「はっはっは、愉快だ！友達の魔法で倒される人なんて聞いた事ないな、傑作だ！うん！」

「く……く……」

「なんだ、また抵抗する気か？」

ボスは、再度檸檬の方を向く。しかし、檸檬は、治から一行の説明を聞いていた。

「ハルスは、操られているんだ。」

「えっ！？」

うつぶせになつたまま、二人は話している。

「く……く……」

「誰だ！」

ボスは、周りを向き回す。しかし、それらしいことを言いそうな人はいない。その前に、4人以外誰もいないはずであった。

「く……く……」

今度は、音源がよく聞こえた。それは、ハルスの口からであった。

「うつうつうつうつ……」

ハルスは、ついに震えだす。その振動は、次第に大きくなる。目を瞑っている。

「うつうつうつうつ……」

「ハルス！」

檸檬が、起き上がってハルスに杖を向ける。

「目を覚まして！」

立ち上がる。治も、立ち上がる。

「ハルス。」

治がこう言くと、ハルスの体中が黒っぽく見えてきた。それは煙らしく、その黒い煙は次第に大きくなり、そして、ハルスの震える体から離れて、上に上っていった。

「ち、ちよつとまで、」

ボスが慌てて上を向いて叫ぶ。しかし、それも後の祭り。前を向くと、ハルスが自分に杖を向けている。その瞳は、明るい桃色に輝いている。

ハルスは、白い顔になって、白い声で言った。

「よ、よくも、あたしを、」

第19話 回復（後書き）

久しぶりの投稿です。

SourceForgeにApplicarsoftを申請してしまい、

Applicarsoftのカテゴリの充実に追われる中での投稿となりました。

第21話で、そろそろ恋愛に行こうかと思ってますが、無理。無理。絶対無理。作文苦手。はい。

第20話 終了

前。横。二人の魔法使いに一斉に杖を向けられているあさきゆめみしのボス。しかし、彼は、平然とした顔で言う。

「ここがどこかわかるか？」

白昼の光があまり差してこないくらい建物が高く、薄暗い。この空間で何が出来るようか。

「わからない。」

檸檬が言うが、ハルスはそれを否定する。

「ううん・・・ここ、確かあさきゆめみしの、」

「アジトだ。」

連歌の如く、ボスが続ける。

「つてことで、来い！」

と、あちらこちらから、一斉に人が出て来る。それぞれ、リーゼントをしている人が多い。黒い服が主だが、白い服もあちこちに点在していた。その数20人。ハルスは、檸檬と治の方に駆け寄り、3人で固まっていた。前と後ろには、それぞれ10人ずつの不良が囲んでいた。

「やれ。」

ボスが、言った。ハルスと檸檬の、イクスプロージョン、ゴストなどの呪文が響く。しかし、ここは狭い所。呪文の詠唱が不良が寄ってくるのに間に合わず、3人は約3分を経て、ぼこぼこにされ、縛り上げられて端っこに座らされていた。

「さて、こいつらをどうするか。」

ボスが、3人の前に立って、勝ち誇った声で言う。その後ろに、不良約20人がばらばらに立っている。

「この杖を折るぞ？」

ボスが、2本の杖を右手に差す。そして、左手で端っこを掴む。
「やめて！」

ハルスと檸檬が同時に言ったその時・・・

「スリープ」

どこからともなく声がして、ボスの後ろの20人の不良たちは、みなばたりばたりと倒れこんで、眠りだす。ボスは、後ろを見て、かれきの山と化した手下達を見る。

「起きろ！」

ボスが慌てて、前で眠っている数人を蹴飛ばす。すると、近くから足音がする。

「誰だ！」

ボスのその声に応えて、一人の男が曲がり角から出てきた。彼は、ギターをひきながらの登場であった。

「名乗れ！」

ボスがそう言うにもかかわらず、彼は勝手に言う。

「祇園精舎の鐘の声、」

「名前は何だ！」

「諸行無常の響きあり、」

「言え！」

「娑羅双樹の花の色、」

「名乗れ！」

「盛者必衰の理を表す、」

「まじめにやれ！」

「おこれる人も久しからず、」

「おい！」

「ただ春の夜の夢の如し、」

「このやろー！」

「たけき者もついには滅びぬ、」

「こんちきしょー！」

ボスは、ついに彼の所へ歩み寄り、彼のぼろぼろの服の襟を掴む。
「名乗れ！」

治が、呆然とした顔で言う。

「学校は？」

「明日一緒に叱られてあける。」

「というか、明日土曜日。」

「そう。」

檸檬は、最初から知っていたとでも言うように、薄い微笑を顔に浮かべる。

「あの・・・。」

恥ずかしそうに、下を向いて言う。

「あの時の、け、結婚の、約束、」

檸檬がそこまで言いかけた時。治の股間をハルスが後ろから思いつき蹴った。

「そんなやつなんかと結婚するの？」

ハルスが怒鳴ると、治は軽く会釈で済まそうとする。

「子供の冗談。」

「嘘から出た誠。」

「だからさー、」

治とハルスの口論は、休むことなく続けられた。それに呆れた檸檬と男。檸檬の方から話しかけた。

「あのう、あなた、なんで言うんですか？」

すると、男は答えた。

「ただの知らない旅人。」

「どこをどう旅しているんですか？」

「・・・。」

男は、それっきり何も言わなかった。

「ところで、君、岡田檸檬？」

「はい。」

「もうすぐ『トンネルを抜けると白かった』って本を出すんですけどしょっ？」

「はい。チラシを見ましたか？」

「はい。」

男は、そう言うと、持っていた杖を胸のあたりまで持ち出し、軽く振る。すると、1枚の色紙と1本のペンが出てくる。その2つは、檸檬の足の下へ落下する。男が杖をもう一回振ると、その2つの物体は、檸檬の胸の前で止まって浮いた。

「サインを。」

檸檬は、だまってその色紙とペンをはらいのけた。しかし、魔法のかかったままのその2つは、位置が変わっただけであり、二人の横で遊弋している。

「なぜ？」

男が、尋ねる。

「サインすることが、あたしの運命ではない。」

「大胆だねえ。」

男は、それだけ言うと、ぶいと後ろを向いて歩き出した。檸檬が後ろを見ると、ハルスと治の口論は喧嘩に発展している。というか、この喧嘩、ハルスの魔法が一方的に勝敗を決している。

爆発の音が響く。檸檬の足元には、色紙とペンが落ちていた。

「今日から、そ、その、」

月曜日の朝、玄関で靴を履いている、学校に行かんとする治の隣で、セーラー服をしたハルスは、もしもとしていた。

「い、い、一緒に、学校、」

「だめだ。」

治は、その申し出を強く否定する。

「手をつないで、」

「厳禁。100%実現するとは思うな。」

昨日の喧嘩のことなど忘れたそぶりで、治は靴を履き終え、立ち上がる。

「なんだよ。急になつきやがって。」

治は、それだけ言うと、玄関のドアをばんと開け、閉めた。ドアが

完全に閉まるのを見ると、ハルスは彼女の持ち込んできた靴に足を入れる。

「大丈夫？」

後ろから、お母さんが心配そうに尋ねる。

「何がです？」

ハルスが答える。

「本当に好きなの？」

「ええ。」

「友達として？それとも、異性として？」

「異性。」

「なんか仲悪そうね。」

「あつちがバカだから気付いてないだけ。」

「将来、結婚する？」

「……絶対、する……。」

ハルスが、小さい声でそう言うと、母はにんまりとした。

「何ニヤニヤしているんですか？」

ハルスが尋ねると、母は「ううん。」と言う。

「いつてらっしゃい。」

母が言うと、ハルスも立ち上がり、かばんを掴んで、ドアノブを掴む。

「いつてきます。」

ハルスは、治の行った通学路を走りながら、以前は機械的に仲良くなろうと思っていたんだけど、治から別れた瞬間、ちよつと寂しかったなあ……。これ、恋心なのかしら……。なんて考えていたら、視界に治が入る。

「あつ、治！待って！」

「ややっ、ハルスか！」

ハルスに気付いた治は、走り出す。二人の追いかけっこが、始まった。

「待つてえ〜〜」

ハルスがこう言っても、治は答えない。ひたすら走るのみ。

「待つてよ〜」

ついに、ハルスは杖を構え、治の背中に向ける。

「ストップ」

しかし、そこは十字路の曲がり角で、治は右に曲がってしまった。

向かいで散歩していたマナーじいさんに、その魔法が当たる。ハルスが杖を構えたまま右に曲がる頃、マナーじいさんは、叫んだ。

「体が、動かない、おい！その女の子！」

しかし、ハルスは走ったまま振り向きも減速さえもしない。

「こら！困っている人を助ける！」

マナーじいさんのその声は、もうすでに治のことばかり考えているハルスの頭へは入らなかった。

第20話 終了（後書き）

ついに、第21話から、

ハルスと治の恋愛が本格始動します。

第3部からは、さらに面白くなるつもりですが・・・

とにかく、これから

登場人物がこれでもかというほど増えますので、

メモの用意をお願いしますw

第21話 民族

「とにかくな、さっさと用事を済ませて帰れよ。」

とうとう捕まり、頭にたくさんのたんこぶを作ってもらった治は、

ハルスに言う。

「だつてえ、」

ハルスは、頬を赤らめる。

「と、とにかく、こ、これから、治をいじめたりしないから……。」

「魔法を使わない？」

「うん……。」

ハルスの顔が真っ赤になるが、治は言う。

「俺、僕？」

「ううん。」

「もう二度と、僕と言わないと誓うか？」

「ええ。」

「そっか。帰れ。」

「居候よ。」

「死ね。」

「居候よ。」

「くたばれ。」

「居候よ。」

ハルスは、無理にニコニコした顔を作って、治に示す。

「ブス。」

「居候よ。」

「くそつたれ。」

「居候よ。」

「変態。」

その言葉に、ハルスの堪忍袋の緒が切れる。

「ねえ、僕。」

ハルスは、ニコニコした顔で言う。そして、杖を治に向ける。

「ねえ、僕。」

「お、おい、ま、魔法は、」

「例外。」

ハルスがそこまで言うと、後ろから怒鳴り声がする。

「ちよつと！あたしの治君は渡さないわよ！」

檸檬だった。

「檸檬！治はあたしのもの！」

ハルスは、杖を檸檬に向ける。檸檬は、

「友達を殺す気？」

と、ハルスに杖を向ける。

「あんたもじゃないの。」

「うるさいわね。」

二人が、緊張状態でいる間に、治はそろっと忍足で、その現場から脱出する。

「おはよう！」

教室のドアをバンと開け、治が言う。生徒達も、各々「おはよう」

「おはよう」など返す。

「おはよう。」

一人の少女が、治に近づく。そして、治の両手を握って、治の唇に自分のそれを近づける。

「お、おい・・・。」

治が、慌てて顔を後ろにそらす。

「五十嵐・・・？」

果たしてその少女は、無口の少女、五十嵐由美であった。由美は、さらに治の顔に近づこうとする。治の上半身は、さらに曲がる。

「あたっ！」

治は、ついに廊下に座ってしまった。しかし、由美の唇の先は変わ

らない。

「お、おい？」

治がいろいろ言ったが、由美は急に言った。

「あ、あの・・・。」

「あの？」

「檸檬と、ハルス、け、欠席？」

「欠席予備軍。」

「そう。」

由美がそこまで言うと、急に治の唇に自分のそれをぶつける。

「う・・・。」

横から、二色のうなり声が聞こえる。治は、慌てて由美の顔を押し
のけると、横を見た。

「檸檬！ハルス！」

しかし、二人は怒った表情を変えない。

「何よあんた！」

ハルスが、怒鳴って治を蹴る。

「い、いや、だから、これは、あっちがいきなり・・・。」

と、治が前を指差す。檸檬が、指摘する。

「誰もいないじゃないの。」

「え？」

治が振り向くと、そこにいたはずの由美がいない。

「と、とにかく、変なことしたら、オブジェにしてやるんだから。」

ハルスがそう言う。その頬は、ピンク色になっている。治は、そんなハルスの頬にも気付かずに、立ち上がって教室に入る。

「ちよつと！」

ハルスが、治の左足を掴んだら、治は転んでしまった。

「何すんだよ！」

「ちよつと、何か言ってよ。」

「何で言えばいいんだよ？」

「『立って』。」

「言わん。」

「言つて。」

治は、そんなハルスの腕を払いのけ、立ち上がるとそのまま彼の机まで行ってしまう。

「ちよつと……。」

ハルスが、後ろに立っている檸檬をにらむ。

「あんたのせいよ！」

ハルスは立ち上がり、檸檬に飛び掛る。ハルスは、檸檬の肩を前後に激しく揺らしながら、言った。

「あんたのせいで、あたし、ふられちゃったじゃないの！」

「そんな自暴自棄な……。」

「そうだよ。自暴自棄になっていたら、そのかわいい顔が台無しだ。」

「

横から声がして、ハルスはきつとした顔でそちらを見る。一人の男の子がいた。

「あんた、誰？」

「僕？」

彼は、口にバラを咥えている。

「僕は、世界一の美少年の、」

「イクスプロージョン。」

ハルスは、黙って彼に杖を向けて呪文を放つ。

「おはよう。」

爆風をあげながら横向きに倒れている男の子の後ろに、葛飾先生が立っていた。

「変な事をしたな。」

葛飾先生は、こわばった顔で言う。ハルスは、怯えた声で、後ずさりをする。

「あ、あの……。」

「あの、何だ？」

「そ、その……。」

ハルスは、耐え切れなくて杖を放り出すと、そのまま教室の中へかけだした。檸檬は、その杖を拾ってから教室の中へかけだした。

「I studied English yesterday. Studying English is interesting. I like to study English. How do you study English? I'm reading...」

立っているハルスのその完璧としか言えない英語の発音を聞き、英語の先生、ちようそかへとしお長宗我部俊夫先生は、驚いた顔をしている。

「お、おい、次のピリオドまでと言っていたぞ？」

「は、はい・・・。」

ハルスは、椅子に座る。周りから拍手がする。横をチラッと見るが、治は教科書のみを見ていた。なによ、とハルスはつぶやく。

「私は今まで発音記号を何度も教えた事はあるが、これほど完璧に発音させる先生はどこにいます？できれば、」

「いません。なんとなくです。」

ハルスは、横をちらちら見ながら不安げに言った。ハルスの視線の頻繁な変化に気付き、治は急に立ち上がり、ハルスのピンク色の頭に対して怒鳴った。

「おい！おまえ外国人だろ！外国人だから髪の色も黒じゃないんだ！黒じゃないから拍手するな！」

周りの拍手が、一斉に収まる。

「そうか、頭が黒じゃないから特別なんだな。」

長宗我部先生が、言う。ハルスは、きつと治の方を振り向く。長宗我部先生は、続ける。

「しかし、それは民族の違いだ。」

クラス中は、殺戮とした。殺伐な雰囲気。

「民族の違いを色々突っ込んで、きりがない。」

「しかし、先生、ハルスの頭が黒じゃないから、目立ち過ぎで恥ず

かしいんです。席替えしたいです。」

治は、平然とこう言った。

ハルスは、とうとう堪忍袋の緒を切らして、立ち上がると、治の襟を掴む。

「あんたあゝ、家に帰ったらお仕置きよ。」

「なんでだよ。」

「あたしが檸檬に代わってお仕置きしたける。」

「何であたし？」

教室の、これまた中途半端な所にいた檸檬も立ち上がり、後ろを振り向いて二人に突っ込む。

「あ、あたしのつつこみセリフ！」

伊勢田由香も立ち上がる。

「セリフ泥棒！」

由香が怒鳴る。

「盗んだ物はきっちり返さないと。」

羽生かおるも、立ち上がる。

「まあまあ、諸君、僕の顔に見立てて許してくれないか。」

男の子が立ち上がる。ハルスがその声に気付き、治を掴んでいた襟を離し、その声の方角へ振り向く。はたして、そこには朝、自分を美少年とほざいていた少年がいた。

「改めて、僕の名前はね、」

少年がこう言ったダイミングで、長宗我部先生が言う。

「座りなさい。」

「は、はい……。」と、立ち上がった人々は、一人残らず座っていく。

「ちつ……、あの女の子で100股目なのに……。」

トイレで、一人の少年が歯をぎりりとかみしめて、目から涙を落とす。例によって、その少年は、美少年とほざいていて、本当に美少年だったりする、ほたるさきちゃん蛸崎惇。

「くぞつ・・・、100股目でやっと呪いがとけるのに・・・。」

惇の目から流れる涙は、勢いを増した。

「うつ・・・。」

惇は、腹を押さえてしゃがみ、うめく。誰もいないトイレでは、惇の呪いに気付くものはいなかった。

「こ、この呪いさえなければ・・・。」

惇は、歯茎から血を流し、顔を上げる。その顔は、

第21話 民族（後書き）

呪いはなんでしょうか？

第3部で明らかになります。

まあまあ、そんなに気を落とさないで、

ハルスと治のやりとりがもっと面白くなるかもしれません。はい。

僕は、あきつぱいので長い小説を書くのは苦手で、

この「居候」も手っ取り早く終わらせようとして、

本来は第12話で完結する予定でしたが、

歯切れが悪すぎで続きを書くことになりました。

で、第1部、第2部、第3部・・・と、第何部で終わるのでしょう？

一応、1部で12話ですので、第2部は第24話で完結します。

あと3話だ、ふぁいとー！！！！

1話全角で3000字程度。ってことは、あと9000字、

10000字近く書かなきゃいけないんです。

・・・お願いです。

僕の飽きつぱい心を抑えるために、

お願いです応援してください。

評価は第2部が完結してからで構いませんw

感想ばかり書いていても信頼度は下がりませんから。

はい。はい。

・・・・・・・・・・・・・・・・

来るわけありませんよね。

濁点落ちこぼれ小説ですし。はい。

第22話 本音

「では。」

社会の先生、時田賢昭ときたけんしょうは、教室で教壇に立って、生徒達の前で言った。

「今日も蛭崎さんはいないんですね。」

教室は、沈黙としている。

「毎日のように、蛭崎さんは4時間目の授業に出ていません。」

教室は、沈黙としている。

「なぜですか。」

教室は、沈黙としている。知らないものは知らないのである。

時田先生は、そんな教室を見回すと、言った。

「では、大日本帝国・平成天皇の名にかけて、絶対蛭崎惇さんを見つげ出します。」

時田先生は、戦後の生まれであり年も20年代なのに、今の日本を「日本国」ではなく「大日本帝国」であると確信している。その根拠はないのだが、彼の生活も、大日本帝国憲法の下で行動しているのである。すなわち、徹底的に愛国心を持ち、天皇を尊重している。今の天皇は国事しかできないことなんで知らない。というか、拒否している。

「では、大尉に羽生かおるを任命します。」

「はい……。」

呆れた声で、羽生かおるは座ったまま言う。

「ちょっと待ってください！」

伊勢田由香が、突如立ち上がって言う。第1話で出したまま埋もれていたが、彼女はつつこみが好きである。

「先生！今の日本は、憲法第7条により、戦争は永遠に出来ないことになっています！」

「大日本帝国憲法第7条に、そのような規定はありません。」

「ですから、憲法変わったんです！」

「憲法では、上下関係を重視すると定められています。従って、あなたは先生と生徒の関係を侵害したことになります。逆らった時点で、違憲となります。」

「ですから、憲法変わったんです！人はみんな、平等です！」

「キリスト教は、信じただけで違憲に近い行為となります。」

「ですから、憲法変わりました！」

それに従って、羽生かおるも立ち上がる。

「1946年11月3日、日本国憲法が発布され、1947年5月3日に施行されたのです！戦争は終わりました！憲法、変わりました！」

「師に反抗しましたね。」

先生が言う。

「ですから、」

「とにかく、先生の指示に従いなさい。」

先生は、剣幕を見せつける。生徒達は、それに怯えたふりをして、呆れた顔で”先生の指示”に従った。

零時ハルス、零時治、花尾武子、五十嵐由美、岡田檸檬。

この5人が、大日本帝国第5番陸軍に所属することになった。軍隊長は、零時ハルス。将軍は、零時治。そして、なぜか書記まてついている。ちなみに書記は、岡田檸檬。

大日本帝国第5番陸軍は、主に細長い校舎の真ん中に位置する各階唯一のトイレと、そこから西の部分进行搜索する任務を仰せつかった。

「あきれて物も言えないわねー。」

武子が、愚痴をこぼす。

「ま、しょうがないよ。」

治が言う。彼は、大日本帝国第5番陸軍で唯一の男子である。五十嵐由美は、黙ったままである。

「さ、先ずはここね。」

と、ハルスが指差したのは、教室のある階と同じ階にあるトイレ。
「さ、入るわよ。」

ハルスが張り切った声で言う。他の4人も、黙ってそれに従う。ハルスがそのトイレのドアを開けて、スリッパに履きかえるまでのちよつとした空間を見回した刹那、

「見つけ。」

と、歓喜を上げた。なんと、その空間とドアの隅っこに、一人の男の子が泣いていたのである。

「おい、惇。」

治が、座っているその男の子の肩を叩く。しかし、その男の子は振り向きもしない。惇の服を着ている。しかし、皮膚の色に違和感を覚えた。緑っぽい。

「おい、惇。」

しかし、惇は答えない。泣き声がする。

「惇！」

「惇？」

「惇！」

ハルスと由美は、何も言わない。ハルスは、この男の子が朝の気障な人だと気づいたからであり、由美は、もともと無言だから何も言わないだけである。

しかし、惇は振り向きさえもしない。治が、その体を揺らす。そして、顔を無理やりこっちへ持つてきた。

「ゾンビ？」

なんと、治が見たその惇の筈の顔は、ゾンビの顔に近かった。体中緑色の皮膚になっていて、ゾンビの顔はひどく醜かった。

「ぎゃああああああつ！！」

檸檬が、悲鳴を上げる。ハルス、武子も同様の悲鳴を上げる。しかし、由美は元々無言なので、何も言わない。表情さえも変わらない。それに気付いた武子が、由美に言う。

「ちょっと！こんな時に何も言わない女の子っているの？」

しかし、由美は答えない。しかし、そんな事をしている場合ではない、と武子は悟った。はっとして治の方を見ると、・・・

「よくも、見たな・・・」

制服を着たゾンビが、治の制服の襟を掴んでいる。緑色の、醜い顔を真に見て、治は怯えた顔をした。

「この爪で切り裂いてやる・・・」

ゾンビが、左手の甲を見せつけた。5本の指の爪が、人間のものではない、異常に長くなっていることを、治は見た。

ゾンビは、怯えた顔をしている治の顔に対して、爪を以ってそれを切り裂こうとする。

「ちょっと！やめてっ！」

ハルスが、大声を出す。

「その人は、あたしにとって大切な人なの！」

「おい！恋人じゃないと言っておいて、それはないだろ！」

治が、無理やり後ろを向いて、言った。しかし、ハルスは言った。

「確かに、いつか恋人じゃないと言って記憶を取った覚えはあるけれど、あたし、別れてからいつも治のことばかり考えるようになって、やりきれなくてまたここに来ただけ！」

ハルスは、頬を染めて下をうつむいて言った。そして、続ける。

「あたしの唇は治のもの。治の唇はあたしのもの。」

その空間が、一時沈黙に包まれる。そして、次の瞬間、ハルスが脇に手を伸ばそうとする。

「あっ・・・」

彼女は、今朝葛飾先生の前で杖を放り出したことを思い出す。

「杖でしょ。」

突如、後ろから檸檬の声がする。ハルスの視界の右に、一本の茶色の棒が突き出ている。

「拾ったわ。」

檸檬がそう言い、ハルスが自分の杖であることを確認すると、「あ

りがとう」と言ってそれを掴み取り、ゾンビに向ける。

「優しい悪魔もいるわ。」

と、ハルスはゾンビに対して言う。

「おい！武力は使うな！」

治が、ハルスに対して言う。と同時に、ハルスの足元に放り出される。ゾンビは、そのまま黙ってハルスに近づく。

「ち、ち、ちよ、」

いさとなると頼りない人には困ったものである。

「ちよつと、あたしを食べてもおいしくないわよ！」

「だめだ。」

「え？」

突然ゾンビが口をきいて、ハルスは戸惑う。

「みんな、僕の顔を見て、怯えて逃げ出す。毎日4時間目になるとゾンビになってしまふ呪いをかけられて、それで、」

ゾンビは、100股をかけなければ呪いはとけないということを省略するという方針の下、説明し始めた。

「道で歩いてぶつかっただけで、僕に呪いをかけた。」

そのいきさつに、ハルスは驚いた顔をする。

「そんないきさつ、聞いたことないわ！」

「しかし、現に僕の例がある。」

「・・・・・・。」

ハルスは、治の腕を無理やり組んで、杖を惇に構える。

「嘘？」

惇は、黙って頷く。

「もっと黒い事情があるのね。」

ハルスが言つと、惇は黙って頷く。

「とにかく、いなかったことにするわ。」

ハルスが言つ。

「ちよつと、ハルス？」

檸檬が、後ろから声をかける。しかし、ハルスは、首を回さずに言

った。

「隊長。」

「ぐ……………」

檸檬は、悔しそうな声で言い、そして続ける。

「ここには誰もいなかったから、さ、トイレから出ましょう!」
と、トイレから出る一番陣を取った。

トイレの中には、一人のゾンビが存在するのみとなった。

第22話 本音（後書き）

あと2つで第2部おしまいだと言うのに、
これでは24話で区切るのは出来なさそうです。
でも、むりやり区切ってみます。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9799a/>

居候 2

2010年10月8日13時51分発行